

「太平山麓九条の会」だより

事務局：須黒法律会計事務所 〒328-0027 栃木市今泉町 2-4-18 FAX0282-22-3757
電話連絡先 0282-22-7079(増田)
Eメール oohirasanroku9jo@yahoo.co.jp HP：太平山麓九条の会で検索



173号
2021年11月26日発行

憲法を守り抜く行動を！

田上 中

10月の衆議院選挙で、憲法の改悪を目指す自民公明に維新を含めた改憲勢力が、3分の2を占めてしまった。そして情報では来年7月の参議院選挙と同時に、改憲の国民投票をするとのこと。これに対して、絶対平和を誓った憲法を守る責任が、私たち国民に委ねられています。憲法前文の最後には「日本国民は、国家の名誉にかけ、全力を挙げてこの崇高な理想と目的を達成することを誓う」と断言しています。



今こそ、私たちは知恵と力を出し合って、憲法を守る行動を積極的に展開する必要があります。

その第一は、自公政権が、憲法を無視して、アメリカの言いなりに軍備を拡大強化して、まさに戦争体制にある問題です。これは、まさに憲法9条に違反しています。多くの人にこの重大な問題を知らせ、憲法改悪は絶対させないと認識するよう行動を強化していくことが重要になるのではないのでしょうか。

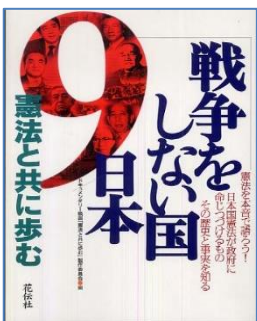
第二は、投票の重要性を知らせる行動です。投票をすることによって、私たちの生活と生命が守られていること。政治がよくなるのも、悪くなるのも、私たちの投票の在り方によって左右されることを多くの人にしっかり伝えることです。

そして、憲法改悪を阻止するためには、大企業から受ける政治献金の見返りに、大企業に有利な政治をする自公政権を存続させないために力を合わせている野党が、選挙で勝つことが重要な鍵になると思っています。

東京に球状の「9条の碑」

足立区の市民が「9条の碑」を建立します。磨かれたステンレスの球に日本国憲法第九条1項2項が刻まれ、見る人が鏡面に映り九条と一体化するというユニークな碑です。千住に設置され来春序幕が行われます。

ビデオ「戦争しない国日本」の視聴会



衆議院選挙の結果を受け、改憲の動きが着々と進んでおり、看過できない状況です。このビデオの視聴会はコロナ禍のため中止しました昨年8月に計画されたものです。10年前に作成されたビデオですが、「日本国憲法」をテーマに、社会的な話題作をとり続けてきた3人の監督が構想を練り上げ、108人の各界を代表する呼びかけ人によって実現され、シリーズ化された作品の第一編です。監督は、社会派ドキュメンタリーを代表する片桐直樹氏です。「日本国憲法が、政府に命じつづけるもの」「その歴史と事実を知る」とあるように、憲法と平和主義について考える機会になることと思います。ぜひお出かけください。

- 日時 1月22日(日) 13時30分から15時30分まで
- 場所 キョクトウ楽習館(旧栃木第一小学校) 大交流室(1階)
- 伊藤真さんの「国民と9条の力を再確認しよう」のビデオを合わせて視聴する予定です。

- ◆スタンディング 12月9日(木) 市役所前 12月19日(日) イオン・カワチ前 15時から
- ◆スタッフ会議 12月9日(木) 13時から・12月21日(火) 13時30分から
1月13日(木)・1月28日(金) 13時30分から キョクトウ楽習館(くらら)

私の母



私の母は今年99才でケアホームでゆったりマイペースで暮らしています。母は、中国の天津（北京南東の大きな港町）で育ちました。母の父がそこで豊屋をしていたからです。豊屋で商売ができるということは、天津、その周辺に日本人が沢山いたということです。天津には日本人街、フランス租界などがありにぎやかな街だったそうです。小さいとき、公園で遊んでいるとフェンスに張り付いて中国人の子どもがじっと見ていた、当時はなんとも思わなかったが差別そのものだった、と言っていました。要するに「〇〇と中国人は入るべからず」だったのです。

天津には日本人学校があり、そこで教師をしていた父と見合いで結婚しました。父は群馬県の渋川市の出身です。なぜ天津に行ったのか、「支那にや四億の民が待つ」という当時のスローガンに胸躍らせ海を渡ったようです。結婚して1年くらいで「終戦」になり、引き上げてきました。その時おなかに兄がいましたが「7か月だったので引き上げ船に乗れた、8か月以上の妊婦は乗せてもらえなかった」と言っていました。

天津は終戦と同時に米軍が抑えたので、治安は良く、満洲から歩いて帰ってきた人たちのような過酷な苦労はありませんでした。引き上げの時は「自分で着て、持てるだけの荷物と現金は千円まで」でした。引き上げ船は米軍が管理、日本人は船底で過ごしました。途中、雨のためか船底に水が溜まった時、日本人は「すわ、バケツリレーだ」と動き出したところに米兵がきて、人差し指を軽くふって「ノーノー」と言いポンプであつという間に吸い上げ、びっくりしたそうです。

帰国後、父の実家の渋川で兄を出産しましたが、栄養不足で母乳が出ず、重湯の上澄みを飲ませたりしたが、3か月を過ぎても首が座らず、まわりは「あの子は育たないだろう」と言われていたようです。その後、粉ミルクが配給になり見る見る太ったとのこと。その時のことを後年友人たちと絵手紙風にした文集があります。

私は渋川市駅前の「引揚者住宅」の2階で生まれました。群馬県の田舎の街に「引揚者住宅」があったことが驚きです。それほど日本中から朝鮮、満洲、中国に日本人が行ったということです。すべては『大東亜共栄圏』の名の下に『国策』として行われた結果だった事を忘れてはならない、と思います。

当時の何百万分の1の「すずさん」だった母でした。

(A T 記)

母の手記



池田俊子(81才) 群馬県：昭和21年引き揚げて5月13日長男が生まれました。生後3ヶ月頃から母子とも栄養失調、いつまでも赤児の首が据わりません。お米の通帳をもって役場で証明書を貰って粉乳の配給を買って急いで帰ってきました。硝子の哺乳瓶でとこして重湯の出るように大きくした乳首の穴からポトンと乳が舌の上に落ちたときふるいついて来てグググーと飲んでそれから命拾いして成長できました。あのときの吾子の顔は今でも覚えています。何も言えない、乳しか吸えない乳児に1番過酷なのが戦争です。これは今の中東やアフリカも同じだと思います。(2004.5.15記)